近江の奴振

長浜市立長浜城歴史博物館
学芸担当主幹　中島誠一

甲賀町 油日神社の奴振

奴（やっこ）というよび名はすでに古代からありました。すなわち律令制下の賤身分であった奴婢を奴と呼んでいます。江戸時代になると、奴は徒士、若党、足軽、中間、小者などの軽い武家奉公人を意味するようになります。歌謡曲のなかで「奴さ～ん、奴さん、奴さ～ん、どちらへ。旦那のお供でお使いに、」と歌われているのは御存じの通りです。

奴は、全国的に見れば歌舞伎や祭礼行列の中で、勇壮・優美・また面白おかしい所作で観衆の人気を集めています。奴踊や荒踊とよばれ、独立した民俗芸能になっているものもあります。近江では奴が登場するのは、祭礼の場ですが、これを奴振（やっこふり）と呼び、大名行列の一部を抜き取った格好で単独で披露されるものや、祭礼行列の先鞭として参加するものがあります。近年では、宿場まつりのパレードなどで欠くことのできない存在です。

ここでは長年、継承されてきた奴振を中心に紹介したいと思います。単独で奴振が祭りのメインとなっている例は、湖北では坂田郡近江町長沢、同宇賀野、同能登瀬に、甲賀では甲賀郡甲賀町油日神社の祭礼で見られます。また祭礼行列の先頭で芸を見せる例としては、湖北では伊香郡余呉町中河内（不定期）、伊香郡西浅井町集福寺、坂田郡伊吹町春照、坂田郡米原町筑摩に、湖西では高島郡新旭町安井川の大荒比古神社を中心とした旧８ケ村の祭礼があります。

具体的に各地の奴振を見てみましょう。

坂田郡近江町長沢の奴振〈滋賀県選択無形民俗文化財〉は、５月１日の熊野神社春祭りと、11月15日に近い土曜日か日曜日の福田寺報恩講の日に奉納されます。長浜曳山祭で猩々丸が出番の際には、朝渡りの行列の先頭を務めます。

《公家奴振》と呼ばれ、江戸時代、長沢の福田寺へ二条家の姫君が輿入れの時の優雅な行列と奴振に感動した門徒たちが、その様子を再現、継承したといわれます。福田寺へ奉納の際には、当日、お寺の横の公民館で身支度をし、町内の宿へ集合します。午後１時に出発、竹杖・先箱・台傘・立傘・毛槍・長刀と続きます。寺門の下では「申し上げまするぞ。本日はお日柄もよろしく、京都二条家から、当山福田寺へ井伊直弼公の仲立ちにより鋼子姫、ただ今到着いたしました」と口上を述べます。なお熊野神社、長浜八幡宮の鳥居をくぐる際には「入」の字を書きます。行列は、擦り足で歩き、足の裏を絶対に見せないのが特徴です。

坂田郡近江町宇賀野の奴振は、４月29日の坂田神明宮の春祭りのお渡りの先導を務める奴行列です。奴は、上体を低く前傾して、尻につくように踵を蹴りあげるところから《蹴り奴振》と呼ばれています。奴振は、井伊直弼の参詣の行列を偲んで大正６年（1917）に始められ、現在では氏子らによる「伝統文化保存会」のもとで雅楽・神楽舞とともに継承されています。

甲賀郡甲賀町油日神社の奴振〈滋賀県選択無形民俗文化財〉は、５年目ごとの５月１日、油日神社の古式例祭に行われます。まず３月１日の頭子選びから始まり、４月14日の獅子の出初め式を経て本日を迎えます。２基の神輿を先頭に、長持奴３人、挟箱奴４人、毛槍奴と押さえ各２人、乗馬の頭殿など60余人からなる大行列です。

官立式・神輿渡御・列結野御旅所での山の舞いに引き続いて、頭殿の古式に基づいた弊振り（奴振）が執り行われます。その由来は古く、天元元年（978）に橘敏保卿が勅使として参向したのを記念し、甲賀（上野・高野・相模・佐治・岩室）の郷土たちが、年々交代で代参したことに始まると伝えます。

近江町 長沢の奴振

近江町 宇賀野の奴振

余呉町 中河内の奴振

以上は、奴振が祭礼行列のメインとなって行われる例です。次に紹介する奴振は、近江で盛んに行われる太鼓踊に付随して行われるものです。

伊香郡余呉町中河内の太鼓踊（滋賀県指定無形民俗文化財）は、８月16日、広峰神社でおこなわれます。この日は野神さんの日で、短冊を背負い胸に締め太鼓をくくりつけた２人の太鼓打ちと、鉦をたたきながら踊る鉦打ちによって太鼓踊が奉納されます。踊りには音頭取り・笛吹きが紋付羽織で加わります。この行列の先頭を受け持ち、氏神まで奴振が行われます。道中、先箱・台傘・立傘などの奴は、２人１組でそれぞれの持ち物を踊りの手つきで巧みに受け渡しをしながら進んでいきます。

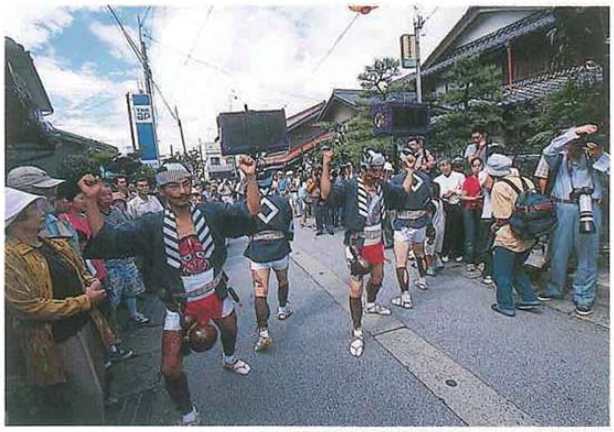
伊香郡西浅井町集福寺の花笠踊附奴振（滋賀県選択無形民俗文化財）は、８月16日、下塩津神社の祭礼に奉納されます。花笠踊は別名チャンチャコ踊りともいいますが、中踊が打つ鉦、太鼓の音「チャカチャンチャン」からそう呼ばれています。踊は鉦・太鼓・棒による中踊、その周囲を美しい花笠と音頭の側踊が取り囲んでおこなわれます。花笠踊の伝承曲は全部で20曲、この中には通常演じられることのない「雨乞い踊」が含まれています。

集福寺の奴振は、先頭の前杖（警護）２人－長刀１人－挟箱２人－毛槍２人－立傘・台傘各１人－大弓４人－槍・鉾各１人の順番で二列に並び、その後に花笠踊の一行が従い、しんがりには後杖２人がつきます。戦時中までは鉾の後に鉄砲４人が加わり、練り込みの際には空に向かって発砲したそうです。

坂田郡伊吹町春照の太鼓踊附奴振（滋賀県選択無形民俗文化財）は、春照に鎮座する八幡神社の秋祭のある９月23日に５年（平成11年に奉納）ごとに奉納されます。太鼓踊は雨乞い踊とよばれ、元来はのら着のままで踊ったといわれています。現在見る踊は、のぼり－露払い－神官－奴振－法院－山伏－寺社奉行－ふくべ振－音頭－笛－区役員－鉦－太鼓－大うちわの順で八幡神社に到着します。行列の中でも異彩を放つのは、法院・山伏・大うちわでいかにも雨乞い踊と呼ばれるにふさわしいコスチュームです。法院、山伏は、山野に伏して山の霊力を身につけ、超人間的技を身につけた者のことですが、その山伏の吹くホラ貝は水と関係の深い楽器であり、巨大なうちわは風を起こし雨を呼ぶという設定です。なお奴振は、春照が北國脇往還を行き来する大名行列の華麗さ、いなせな奴振を模倣したと伝えています。この華麗さは喜雨の踊を奉納する返礼踊の中心をなすものでもあります。

この地域には同様の太鼓踊が、山東町朝日、大野木、井之口などで現在も行われていますが、奴振が行われるのは春照だけです。

西浅井町 集福寺の奴振



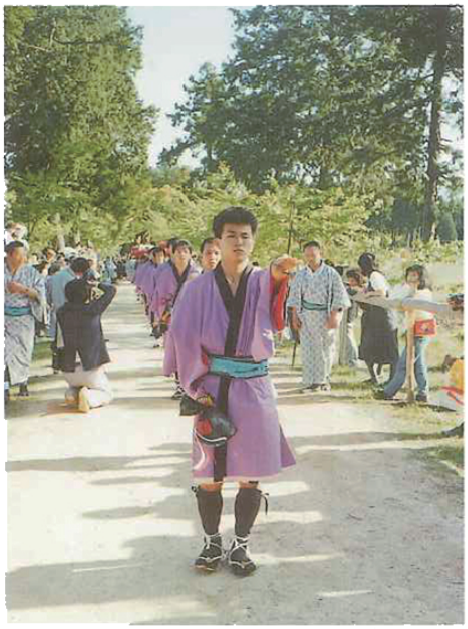
伊吹町 春照の奴振

次に挙げるのは古式祭礼行列の中に、奴振が組み込まれた例です。

坂田郡米原町筑摩神社の春の例祭は、筑摩と三多良（上多良・中多良・下多良）によって５月３日に行われます。７～８歳のあどけない少女が、張り子の鍋、釜を被り、緑の狩衣に緋の袴で氏神である筑摩神社に渡御することから鍋冠祭と呼ばれています。本来は筑摩神社の春の大祭における祭礼行列の一部ですが、筑摩から参列する女性の異風が人々の耳目を集め、祭りのメインに位置づけられその呼称になったわけです。

祭礼行列は、各字が午後１時前、筑摩の御旅所に集合、出発します。鉾持―猿田彦―獅子―中多良の太鼓山―母衣―神鏡―下多良の太鼓山―母衣―神鏡―次に筑摩、上多良と続き、楽人―楽太鼓―楽火火鉢―神官―唐櫃―翳（さしば）―御鳳輦―神主のあとに古式祭礼委員長―各字区長―曳山そして紋付き袴、着物の両親につき添われ鍋冠の少女たちが続きます。奴は普段、鍋冠の衣装などが納めてある先箱を担いで、行列の先頭にたち、境内の鳥居をくぐったあたりから力強く練り込みます。

湖西地域では、高島郡新旭町の大荒比古神社の５月４日の例祭である七川祭（滋賀県選択無形民俗文化財）に奴が登場します。七川祭は、鎌倉時代の領主、佐々木信綱が当地に祖神を祀り、出陣の際には必ず当神社に祈願をかけ、戦勝のおりには、12頭の流鏑馬と12基の的を献納したのが始まりと伝えます。現在も神輿の渡御、流鏑馬そして旧８ケ村から、毎年輪番で、的を片手で持って練り歩く〈的練り〉12人、・酒樽を肩に担いで踊る〈樽振り〉２人を選んで奴振を奉納しています。



新旭町 大荒比古神社の奴振

以上、早足で近江の奴振を見てきましたが、その発生を、江戸時代以前と伝承する地域もあり、単に江戸時代の大名行列の一部を抜き出して模倣したものではないということがお判りいただけたかと思います。すなわち奴振は、元来、祭礼行列の先頭に立って、神聖な行列の進行が邪悪な霊によって、阻止されるのを防ぐ役目のもの―太刀振りなど―と同じ意味を持つもので、次第に風流化して、滑稽、勇猛な点が強調され現在に至ったのではないかと思われます。

坂田郡山東町河内には、奴を生業にする人たちがいて中山道の醒ケ井と長久寺の間を受け持っていました。その奴振の際には、箕のなかに長さ40ｃｍくらいの木製男根を入れ、赤い布をかぶせ、チラチラと見せていたそうです。河内では現在も、年頭のオコナイ行事の際、余興として木製男根や野菜で拵えた性器の作り物が登場し人気の的ですが、本来は子孫繁栄と五穀豊饒を祈念してのことです。河内の奴が木製男根を披露していたというのも、余興ととらえがちですが、元来は、魔よけとしての意味合いが強かったのではと思われます。

参考文献
「滋賀県の民俗芸能」平成10年　滋賀県教育委員会
「祭礼事典・滋賀県」平成３年　桜楓社
「近江の祭礼」平成元年　近江文化社

滋賀文化財教室シリーズ　No.195号
発行年月日　2001年３月１日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525